
カートゥーン・チルドレン

ばるでら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カートウーン・チルドレン

【Nコード】

N3824J

【作者名】

ばるでら

【あらすじ】

超常現象具現体質化症候群と呼ばれる病気がある

6〜18歳までの少年少女達だけに感染し、世界に数名しか症例のないこの病はその希少性以上に、この病そのものが長年世の研究者達の議論の的になっていた

曰わく、コレは本当に感染症なのか？

……そもそもこれは病気なのか？

ノイローゼとなる研究者も出たというその病状
それを単純に言ってしまうえば漫画の中の人間のようになる
ということ

カートゥーン・チルドレン

別名漫画の中の子供達と呼ばれた子供達を治すべく研究者達はその
身を惜しまず研究をしていた……が
投げた。あまりにもむちゃくちゃだから

患者が悲しむと彼等の周りだけに心模様を表すかの如く雨が降り
熱を出した患者のおでこを第三者が触れば大火傷を免れない（不思議
とすぐ直る）

世の理を完璧に無視した病気がどうかもわからないこの病に人類は
両手を上げて降参した

そんな病にかかってしまった。……俺じゃなく俺の彼女が

最初は戸惑い、らしくなく不安を隠せない彼女だったが、適応して
いく内に気付いたらしい

……これはオイシいと

そんな感じで最早治す気もなく日々を満喫する彼女
まあこれはこれでいい……のか？ん？……ん？

前書き

何十、何百万に一人。世間からそう表される人物は何かの天才であれ不幸な病にかかってしまったのであれ、実際の人数は統計の数字よりずっと少ないんじゃないだろうか

テレビやら何やらでそういう人物がでてくる度そう思うことがある
例えば一万に一人の天才とかいえば俺の住んでるところは六人いることになる

10万人に一人だといない可能性もあるがどちらかと言えばいる
だが俺は生まれも育ちもこの町だが、残念ながらお目にかかった事はない。まあ知らないだけでたぶん居るんだろうけど

第一テレビの中に映る人間なんて同じ地球に住んでいようが、紛れもなくしがない一般人である俺にはドラマとかファンタジーの世界の住人とかと似たり寄ったりだ

俺の身の周りだけの小さなコミュニティが確実に俺にとっての世界の全てで、その中では今現在さっき言ったような強烈な個性を發揮している奴はいないし、俺が予想している今後のストーリーの中にも登場する事はたぶん無い。……そう、思っていた。最近まで

現れたのだ。俺の予想を覆してそういう登場人物に《なっってしまった》やつが

……しかもかなり身近な人間

ごくごく普通の高校生活の中で、ある種宇宙人やら異世界人達に負けない個性を持った奴が現れたことで俺の生活は一変し……なかつ

た。全然。これっぽっちも

それこそ得体のしれない魔物が現れたわけでもないし、ましてやそれで俺達が立ち上がるなんてもつと無い

世界の歯車を狂わすには全然力不足の突然の非日常は、あつという間に周りに慣れられてしまつてとるに足らない日常を織りなす歯車の一部となつてしまつた

だからこれからの話は全然ヤマも無ければオチも無い

冒険したりしないし、色恋沙汰でバタバタする事もさほでないし、拳げ句の果てには何かを一念発起したりもしないかもしれない

要は変哲もない俺達の高校生活を特に飾り立てもせず、せつかなのでとりあえずお話してみました的な自己満足の代物だ

なので内容自体はホントつまらないと思う。迷いなく言えるのは肌に合わないと思つた時点で止めていただくのが吉だということ

まあそんな日常でも、ここに書きちゃうくらいには俺は気に入って
いて

皆さんの脳みその容量をちよつとだけ拝借する程度にでもなれば、かなり嬉しいかな！。と、そう思うわけだ

幼なじみ（前書き）

皆様食通気味の幼なじみとか出ちゃうんですよー……
ご勘弁頂きたい

幼なじみ

「寒っ……………」

布団の中から指一本だけをだして室温を確認した
ホントに刺さるような寒さとは良く言ったものだ
布団からでようという堅かったはずの意志が既にこんにゃく並みに
揺らいでしまっている

この辺り一体の冬は微妙にキツイ
その上昨日はこんこんと雪が降り、根雪となった
そのため明け方あたりに氷点下を余裕で下回っちゃう寒さは暖かい
布団から出ずに亀さん状態なるには充分すぎる

しかし、布団の中だけに限って言えば2枚の毛布に3枚の羽毛布団
を重ねた防御。そして湯たんぽという最高の将を得た我が城はあま
りにも完璧だった

「ははは！！ぬるい！！ぬるいわ謙信め！！天下の小田原城を落と
せると思うてか！！」

布団の中に猛々しく響く俺の高笑い

「……………さて」

エセ北条氏康ごっこあるいは高橋紹運ごっこはいい加減に止めてむ
くりと体を起こす。リビングを暖めておくぐらいしなければアイツ
に申し訳が立たない

「んっ……………」

体を伸ばした後、立って布団を畳み、眠さと寒さを堪えながら部屋から出た

フローリングの廊下（なんかわかんないけど俺の部屋だけ畳）に一歩足を踏み出した瞬間、固まる
床が、冷たい

「スリッパは……ってしまった！！下か！！」

スリッパは昨日洗ってリビングに干したままである
というわけで限界を訴える両足の陳情を汲み、全力で階段を駆け下りてリビングに突入

が、ドアを明けた俺はまたもや固まる
部屋が暖かい。物凄く

まさかもう来てるのか……？と幼なじみの姿を探すが見当たらない

「……鍵開けてないのに入ってこれるわきゃねーか」

冷静に考えてみれば当然である

鍵の閉め忘れがない限り入ってこれないのが道理

つてことは暖房消し忘れと言うことになる。あぶねー……

まあそうだよねえ。アイツがもういるわけ無いしねえ
……しかし実際今後は気を付けないと
電気代もバカになら——

「——おい」

「うおうー!」

「……うおうじゃない。入るならさっさと入れ。暖房の無駄になる」

「な、なに。居たの?ここに居ないからてっきり」

「トイレに行ってたただけだ。ほら魚が焦げちまうからサッサとどけ」

「お、おう」

俺を押しこむようにして中に入った幼なじみはそのまま台所に向かう

短く切りそろえられた髪、凛々しいといった表現がぴったりの鋭い目つき

明らかに俺より大きな背中ではもの凄く頼りがいがありそうで、ボロボロなバンカラの学生服がよく似合う

毎朝俺より早く起きて、朝飯を作ってくれ、ついでに軽く掃除までやってしまう甲斐甲斐しい幼なじみは同時に近辺最恐と呼ばれる応援団団長にして、絶滅危惧種である。典型的にして我が校唯一無二の《番長》

その名は柳瀬誠一郎。漢の中の漢である

幼なじみと少しだけ彼女さん

誠一郎は江戸時代その道では名を知らぬ者はないとまで言われた料理人を祖先に持つ家系に生まれた

舌でごくごく僅かな味の機微を感じ取れるその才能はどうやら遺伝らしく、誠一郎の家系には名を馳せた料理人が多い

そんな家柄の中でも代々老舗料亭の料理人を継いできた血筋に生まれた誠一郎

当然彼も幼少の頃から料亭の名を汚さぬ一流の板前になるよう、厳しく仕込まれてきた

しかし、諸行無常のなんとやら、悲しむべきは世の世知辛さか。中学二年の時その由緒正しき料亭は潰れてしまい、中学卒業と共に料亭の見習いになるため、文字通り血の滲むような努力をしてきた誠一郎はその行く先を見失ってしまった

しかし、かえってそれが幸いしたのかもしれない。親の強制もなくなり、誠一郎は自分のしたいことを探すようになった。

そして今は自分の可能性を広げるため勉強中……と言ったところであるが

忘れてはいけない。誠一郎は料理がとつもなく上手なのである。基本は和食だが実際和洋中何でもござれのレパートリーの上、家庭の先生が恐れをなしてボイコットしてしまうようなまさしく鉄腕シェフ候補だったわけだが、そこにうちの母さんが目を付けた
シングルマザーのため仕事で家を空けがちでしかも生活が不規則で
更には微妙に高給取りな母さんは誠一郎にアルバイトを提案した

「毎朝私と息子のご飯作って月3万円はどう？」

そんな提案を誠一郎は引き受けて、中3辺りから毎日うちに来るようになったわけだ

しかも高校になってから弁当のサービス付き

毎朝美味しい飯が食えるのは全くありがたい事ではあるのだが……

「お前さ、今日朝どうやって入ってきたわけ？」

「合い鍵を貰った」

目をつむりながら自分の作ったみそ汁を味を確かめるように飲んでいた誠一郎はこちらを見ることなくそれだけ答えた

「母さんから？」

なんとなく俺だけ凝視するのもあれなので里芋の煮物をつまみテレビに目をやりつつ俺は返す

「他に誰が居る」

「まあ……だなあ……」

誠一郎なら問題無い。むしろ今まで渡さなかったのが気が効かないと言えるのかもしれないが……どうだろう。血縁以外に合い鍵を渡しすぎな気がする

彼女に続いてこれで二人目である

セキュリティ的には大問題で無かるうか

「……不満なら返すが？」

「あー、いやいや。全然いいんだ。……ついでにこれから起こしてくれたりすると嬉しい」

俺の半分冗談半分本気のダメ発言に、それぐらい自分でなんとかしろと言いながら次の【反省】の対象をさっき俺が食べていた煮物に移すこいつは、きっと何だかんだで俺を起こしてくれもするんだろうが……

さすがにそこまでおんぶに抱っこになるのはちょっとアレだ。いろんな意味で

あとその煮物は旨かったから問題ないと思うぞ

「そうか。なら、いい」

誠一郎の料理の美味さはここらにあると思う

自分では無く、振る舞う対象の味覚に合わせる事が出来るということいくら味を細やかに感じ取れるとはいえ人の味覚は十人十色だろうし

「……………」

「……………」

誠一郎は基本無口である。あるいは口数が少ないと言っべきか

俺も積極的に喋る訳ではないので、俺達の食事は静寂が場を包みがちだ

まあ気の置けない仲ではあるから問題は無いのだけども

「……ん？なんかみそ汁変わったか？」

「ああ、出汁の取り方を変えた。併せて味噌もな。二人の舌には今回の方が合ってると思うんだが」

「……確かにこっちのが好きかもしれない」

「なら明日からもこれにしよう」

「おー」

「……」

「……」

なんかこう、若い高校生つーより長年連れ添ったしなびた中年夫婦みたいな感じじゃ無かるうかこれは

沈黙の中テレビから垂れ流される朝の脳天気な芸能ニュースが嬉しいような憎らしいような

しかし最近ふと思う。コレは逆に二人の友情をより堅くするための試練かなんかなのではなからうか
というかそう思わないとやってられない

「なんかいつも悪いな。……あ、そうだ。バイト先の先輩にさ——」

「——いや、遠慮しておく。湊とでも行つてこい」

「……そうか」

「……………」
「……………」

……誘わせてもらえすらない

俺と誠一郎

最近ちよつと倦怠期気味

良く晴れた朝

外はとてつもなく寒かった

息が白いのは基本として耳がきーんというかそんな感じで痛い。勘弁してほしい

出来ることなら早く学校についてしまいたいものだが

昨晩中に除雪車かなんかが道路脇に寄せた雪が歩道を埋めてしまい、そこは歩くに歩けない

しかし住宅街のこの時間はそこそこに車が通るため脇によって車が過ぎるのを待ったりして順調な道のりとはいえなかった

八甲田山演習気分であつちらおつちら歩いていくと学校に行く道までの途中、学校が面した大きな道路と合流する少し前辺りに小さな交差点がある

ここにはたいてい電柱に背を預けてボーッとしている女子高生がいるのだが

今日も今日とて彼女はそこにいた

肩辺りまで伸びた暗いブラウンの髪を二つおさげにして
少し赤くなつた頬と対を成すかのような白いマフラーが良く似合っている

そいつは俺達の事を見つけるとやれやれやつと来たかみたいな顔を
して人差し指と中指だけを伸ばした敬礼みたいなポーズで

「おいすー」

こんな感じで挨拶してくるのがお決まりだ

「おーす」

「おう」

肩掛けの鞆に手には大きな金盥を引きずりながらこちらに歩いてくる
187cmある誠一郎が両手を広げてようやくもてるようなサイズ。
そりとかにも余裕で使えそうな代物だろう

改めて、でかつ……

「なにその盥………」

「なに……って水浸しになったらテストどころじゃないじゃん」

何を当たり前な事を。と言わんばかりの堂々とした態度についつい
ため息が出てしまう

「お前ね……。テストだからってそういう準備の良さはどうなのさ」

そもそも鬱雲を出さないように勉強すれば良いと思うんだが

「いや、私もそう思って勉強したんだけど……。水捨てるので忙
しくて」

「……どれだけ普段勉強してないんだよ」

「だからさ。今日勉強会しょ？あたし馬鹿だから教えて貰わないとわかんないし。……手取り足取り、お願い……ね？」

はいはい気が向いたらなと誠一郎と他の登校途中の生徒手前とあしらうが

「もー、照れちゃって。ホントかわいいなー、私の彼氏さんはっ」

とかなんとか言いつつ、にへへーと笑う

逆効果だったか……

てか俺も笑顔見て可愛いとか一瞬思っちゃう辺りどうかしてる

誠一郎は俺達のこんなやりとり日常茶飯事だから気にしてないが、周りからは朝からいちやつくなみたいな視線

巻き込んですまん。誠一郎

こんな感じで免れ得ぬ赤点や僻みの視線というという障害を前にして、尚脳天気な笑顔を浮かべる目の前の女子高生こそが世界に数名しかない奇病の患者にして、俺の彼女さん

——飯塚湊その人である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3824j/>

カートゥーン・チルドレン

2010年10月9日00時23分発行